

第2回 教育課程編成委員会 議事録

〔日 時〕 平成28年7月6日（水）16:00～17:00

〔場 所〕 厚木看護専門学校

〔出席者〕 厚木医師会長、厚木病院協会副会長、看護協会県央支部長、実習施設看護部代表（秦野赤十字病院看護部長）、実習施設看護部代表（東名厚木病院看護部長）、厚木市市民健康部長、学識経験者（県立東高等学校長）、学校長、副学校長、看護第一学科長、看護第二学科長、教員3名

<委員長>

教育課程編成委員会を開催いたします。

本日の検討議題3点につきまして順番に説明をし、委員の皆様のご意見を頂きたいと思っております。

それでは最初の議題ですが「前回のご意見を基にした取り組み状況」につきまして説明をお願いします。

<委員A>

（別添資料1の看護第一学科の取り組み状況を説明）

<委員B>

（別添資料1の看護第二学科の取り組み状況を説明）

<委員長>

ただいまの説明で何かご質問はございますか。

<委員C>

表記の事で質問ですが、「学習目標」にある「学習」という言葉は、カリキュラムでは「学修」と表記してあるが、看護学校としてはどちらを使っているのか。

<委員長>

「学修」が正しい表記です。訂正いたします。

他にご質問ありますか。

無いようですので次の議題の「3年次の実習アンケートを基にカリキュラムを評価する」についてです。

初めに看護第一学科から説明をお願いします。

<委員A>

（別添資料3の看護第一学科の臨地実習調査結果について説明）

<委員B>

（別添資料3の看護第二学科の臨地実習調査結果について説明）

<委員長>

ただいまの説明で何かご意見はございますか。

<委員D>

設問で「看護の専門的知識・技術を身につけることができた」とあるが、領域が終了した時に評価をおこなっているが、学生が何をもって技術・知識を身につけたのかと判断し、評価をおこなっているのか。また学生達が出来ているのだけれどあまり高く評価できないとか、先生方とのやり取りの中で自分が出来ているのか、出来ていないのか、その辺をどのように考えて点数を付けているのか。もう1つは「教員と指導者の指導に一貫性があった」という設問で学生さんは何に対してズレを感じているのかを教えてください。

<委員A>

看護第一学科ですが、「看護の専門的知識・技術を身につけることができた」については、評価表が影響しているのではないかと思っている。満点を取るというのは自らが率先して全てのことができるということであって、ほぼ満点を取る学生が少ない中で自分ができたという事を評価点から見るとここが足りない、そこが課題という面接もあるし、その中で自分に足りないというものを認識する場面が実習最終日の面接にあって、その後にこのアンケートを取るということがあるので、もしかしてこの評価表を付ける前もしくは面接の前にこれを付けるとすると何か違いがあるのかもしれないが、その場合評定がかなり影響しているのではないか。その時点で教員の評定も指導者の評定も本人には提示をしますので、そこで学生が高い評定を付けてきてもそれが指導する側とはマッチしない点数だったりすると出来高を少し低くする可能性もあるとの認識を持っている。

「教員と指導者の指導に一貫性があった」については、アンケートについて具体的に聞いてはいない。ただ学生から聞く意見としては、一方がOKと言ったのに一方がNOという狭間に挟まれてどっちが正しいのかと聞くことがある。一人の意見が全員の指導者が同じように言っていないと一貫性がないと捉える傾向がある。

<委員B>

看護第二学科ですが、「看護の専門的知識・技術を身につけることができた」については、専門領域の評価表が看護第一学科と同じように自分ができたと思っても他者評価というところではできたとは言えないという事があるのではないか。技術においては実習が終わった度に技術到達度のチェック表を付けることとなっている。その時に自分がどこまでできたかを確認するが、それも自己評価と他者評価があるのでそれで出来なかったという想いがある学生もいるのではないか。

「教員と指導者の指導に一貫性があった」については、確認したことはないが指導者と教員は同じ指導をしているが、受け取る学生がそのように受けていないことも多々あって学生が指導したことをどのように受け取っているのか、その都度確認しないとズレが生じてしまうのではないかと常々感じている。

<委員E>

「教員と指導者の指導に一貫性があった」については、ただ5段階で評価するのではなく、実際にどのようなことがあったのかを具体的に聞かれると良かったのではないか。学生にするとこちらの人は良いと言ったのに、こちらの人はダメということであると、どっちなのかということでも迷ってしまう。教員も指導者も自身が言った事をどのように学生が捉えたのか確かめるということも必要なのではないのか。「教員と指導者の指導に一貫性があった」についての「あまり当てはまらない」と「当てはまらない」が多いように思えるが、数字は分かるか。

<委員長>

これは1年生から3年生の全課程の数字を拾った延べ人数である。基礎Ⅰ・基礎Ⅱ、成人Ⅰ・成人Ⅱや領域別も入っており全部をまとめたものであり、3年生だけではない。1年生と2年生のデータも入っている。
n（対象者数）が出ていないので次回からは出すとよい。

<委員E>

「看護の専門的知識・技術を実につけることができた」の設問で、知識についてはストレートで入った人と社会人を経験した人で違いがあるし、知識があっても技術がない方がいるなど色々な方がいるなか、一緒に聞いて良いのかという気がした。

<委員長>

今の委員Eの質問で一貫性や具体的な事例が分かりにくいというご意見を頂いたが、このことについてどうか。

<委員A>

個人的には聞いても良いのではないかとと思っている。この部分の点数は今年も低いですが、昨年も低くなっているため、全教員へ提示をしてこの結果を踏まえて皆で検討し、翌年の実習に望んでいるが、今年もこの部分が低いということは、自分たちがこうであろうということが本当に学生にとっての満足度につながっていないのではないかと考えることもある。今の話は意見の言える学生のことを言っているだけであり、実際この調査でNOを書いた全ての学生の意見を拾っている訳ではない。例えば毎回拾うのではなく実習の中で一貫性を感じなかった場面で体験したことがありますかなど研究的な視点で一度調査をしてみると学生の捉えている一貫性のなさというのが明らかにできるのではないかと。前向きに検討させて頂きたいと思う。

<委員E>

これは教員だけではなく現場の指導者とのズレがあるということも考えていかないといけないのではないかと。

<委員F>

「実習ゼミにより、実践した内容を意味づけることができた」の設問で、看護第一学科が4.58、看護第二学科が4.41、「看護師の役割を認識し責任ある行動ができた」の設問で、看護第一学科が4.48、看護第二学科が4.71であり、両科で比較した時に点数の開きがある。

<委員B>

実習のゼミの件については先ほど話した事である。一科も二科も同じように実習ガイダンスは行っている。評価点が異なるということはこちら側の意味づけがされているかということが疑問に残るので教員を含めて考えていきたい。学習会のようなところでは意見が出ないので受持ちの看護を通して看護を個別性のあるものにするのはどうするのかということはあるが、意味づけというところに到達しなかった事に対しては反省している。また、責任ある行動については、看護第二学科の学生は准看護学科を卒業しているので積み重ねの学習となる。そうした時に准看護師と看護師の違いというところを入学してから学生は考えながら実習も含めて卒業を迎えるのでより意識が上がり、達成感が高くなる場所ではないかと思う。

<委員A>

実習ゼミについては、レディネスが違うのではないかとと思っている。一科と二科の教員はいつでも行き来でき、同じような実力はあっても、一科は真新しい学生なのでこちらが解説したことがそのまま看護の自分の学びとして意味づけることが容易である。逆に真新しいすぎて教員の意味づけがそのまま入ってしまうという怖さもあるが、そういう意味では学びが新鮮であるというところで点数が高いのではないかとと思っている。責任ある行動に関しては、個人の考えであるが、当校がここに重点を置いた指導を強化しており、1年次からかなり厳しく自分の行動や言動、責任を持つことの評価をしている。学生は1年の時からカルチャーショックを受けている。これが3年間の中でこちらの求める力が付いて来るなかでもっと自分たちを高めたいという意識があるのではないかとと思っている。学生達が教員へ伝えてくれるのは、臨床の実習に行ったら学校よりも厳しいということを実感したという。先生が学校で言ったことが良く分かったということや指導者から伝えられて理解するような事例もあり、そのような中で不満が自分たちの課題に転換していくチャンスではなかったのかと認識をしている。

<委員長>

今回の調査は1年生、2年生、3年生をまとめて行っているため、学年別にした方が良かったのではないかと感じた。この実習の調査結果については学生へ提示をしているが、そうした中でそれぞれの科の中で内容について検討をしているが、両科を交えての検討は行っていないので、学校として教育会議等で共通認識をした方が良いのでは

ないか。レディネスが異なるところで教育をしているので、そうした中では厚木看護専門学校の学生というところではそのようにして行けたらよいのではないか。

<委員D>

学年によってかなり反応が違ってくるのではないかと思うが、今後実習ゼミを行うにあたり何かこうしてみたいということはあるのか。

<委員B>

実習ゼミの時間の確保がままならないという情報が入ってきているので、タイムスケジュールをしっかりと立て、指導者の協力も得て実習時間の確保をし、内容のところでも学びに繋がるような時間を持てるようにしていきたいと考えている。

<委員A>

意味づけのところでは学生の課題も一緒に考えたいと思っており、受け身のゼミでは全く意味が無いので、意味づけしたことが自分の身になるための準備が必要である。その中でお互いに教員もゼミに関する教示の指導案と学生がゼミを吸収できるところまでの準備をすることを兼ね合わせて良い形を構築していくところではお互いに課題があるのではないか。そこを共有する必要がある。一科はそれに向けて取り組んでいるところである。

<委員長>

最後の議題の「卒業後のアンケートを基にカリキュラムを評価する」について説明をお願いします。

<委員A>

(資料4及び自己点検・自己評価 H27 度卒業生調査票結果について説明)

<委員長>

72名の看護第一学科と看護第二学科の内訳は分かるか。

<オブザーバー>

看護第一学科 53名、看護第二学科 4名、不明が 15名です。

<委員F>

設問で「学生の経済的な支援体制は整備されていましたか」の意見内容を参考として頂くことができるのか。厚木市では看護師への助成ということを行っていることから今後参考意見とさせていただければと考えている。

<委員長>

提供することは可能です。後日ご連絡させていただきます。
他にご意見はありますか。

<委員E>

看護第二学科が少ないのは理由があるのか。

<委員B>

この年の看護第二学科の卒業生が 18名と少なかったことがある。当日も 13名の出席であった。

<委員長>

看護基礎教育のところではカリキュラムが改正となり 8年が経過しているが、臨床と看護基礎教育の腑りで統合分野ができた。そのなかで設問⑨を知識と技術に分けていないということがあるが、技術で体験していないところはシュミレーションをおこなっているが、今回の調査結果が 4. 15で一番低い点数となっている。当てはまるが一番少ないことからこの部分に当校の課題があるのではないかと考える。

<委員E>

厚看さんが特別ということではなく、うちでも実習を受け入れているが学生の点数が低いのは現場指導者が根拠を理解して初めて学生にやってみてという手順をおこなっているからではないか。卒業して 3ヶ月のところではそんなにまだ仕事が出来ていない

というところがあるのではないか。

<委員D>

3ヶ月だとまだ現場で先輩について学んでいる状態である。学校で体験している技術は現場だと異なる部分がある。3ヶ月目で自分ができるという判断にはならないのではないか。例えば夜勤に入る際の独り立ちした半年目くらいで聞くと違う結果が出るのではないか。臨床側としては、1年かけて基本的な看護を身に付けてもらえば良いという考えである。

<委員長>

他にご意見が無いようですのでこれで閉会とさせていただきます。

本日いただきましたご意見につきましては検討し、当校のカリキュラムに反映させていきたいと思っております。

以上